

平成 17 年度 肉用牛の入門講座の概要



平成 18 年 3 月

(社)山口県畜産振興協会

山口県畜産課

目 次

1	平成 17 年度肉用牛の入門講座開催要領	P1
2	平成 17 年度肉用牛の入門講座受講者名簿	P2
3	平成 17 年度肉用牛の入門講座の実施状況	
(1)	肉用牛の基礎講座	P3
(2)	現地研修	
	ア 美東町 A 牧場	P4
	イ 周南市 K 牧場	P5
	ウ 周東町 K 牧場	P6
(3)	子牛市場視察・意見交換会	P7 ~ 8
(4)	先進地視察	P9 ~ 11
4	参考資料	
	第 1 期生の情報	P12

1 .「肉用牛の入門講座」開催要領

1 開催目的

高齢化や後継者不足等により県内の肉用牛農家が減少する中で、肉用牛の生産基盤を維持・拡大していくためには一層の規模拡大を推進するとともに、新たな肉用牛農家の育成が大きな課題となっている。

このため、定年退職者や他産業従事者等を対象とした肉用牛経営を始めるに当たっての初歩的な研修会を開催し、肉用牛飼養に必要な基礎知識は実際の肉用牛経営の内容を知る機会を提供し、新たな肉用牛農家の育成・確保に資する。

2 主催者

山口県及び(社)山口県畜産振興協会

3 受講対象者

原則として、県内において新たに肉用牛経営を始めようとする者

4 講師

(社)山口県畜産振興協会職員、県職員及び研修受入農家等

5 開催方法

原則として、年間4回程度の研修会を開催し、肉用牛経営を開始する際に必要となる基礎知識等を修得するとともに、畜産農家における肉用牛飼養の体験学習や子牛市場視察等を行う。(1)開催時期原則として、

1回目:8～9月

2・3回目:9～12月

4回目:1月

(2)開催場所 山口県畜産試験場及び畜産農家等

6 研修内容

(1) 講義

肉用牛を飼養する際の基礎知識や県内における肉用牛経営の実態、経営開始に当たっての支援措置等について研修する。

(2) 現地研修

肉用牛農家の視察や実際に肉用牛の飼養管理作業を体験学習する。

(3) 意見交換

将来の肉用牛経営設計や今後の対応等について意見交換を行う。

(4) その他

受講者の要望等を踏まえ、必要と認められる場合には新たな研修項目を組み入れることができるものとする。

7 修了証の交付

所定の研修を修了した受講生には、修了証を交付するものとする。

8 受講者の募集

毎年度、広く受講生を募集するため、ホームページ・リーフレット等による広報や市町村・JA等と連携した募集活動を行う。

3 平成 17 年度肉用牛の入門講座の実施状況

(1) 肉用牛の基礎講座

- 場所：山口県畜産試験場
- 日時：平成 17 年 9 月 3 日（土）
- 参加者：7 名。特別参加 3 名。関係者 12 名。
- 内容：
 1. 基礎講座
 - 「肉用牛飼養の基礎知識」畜産試験場 山本幸司研究員
 - 「肉用牛経営の現状」畜産振興協会 清水誠技術主任
 - 「肉用牛飼養に係る支援制度について」県畜産課 中村一行技師
 2. 種雄牛視察
 3. 放牧管理グループでの哺育、子牛育成、育成牛、放牧牛、肥育牛の飼養管理
 4. 牧場実習受入農家紹介
 5. 意見交換



基礎講座の様子



肉用牛支援制度の説明



種雄牛の説明



放牧管理グループでの研修

(2) 現地牧場実習

ア <美東町 A 牧場>

- 日時：平成17年10月8日(土)
- 参加者：1名。関係者2名。牧場主。
- 内容：
 1. 子牛への哺乳
 2. 牛舎清掃、耳標装着
 3. 除角、放牧地見学、意見交換



除角作業の様子



哺育バケツ洗浄



子牛の保定



子牛の保定

4. 参加者の感想

放牧が牛にも人にも良いことを実感。実際に自分が経営を開始する際には再度勉強に行きたい。

イ <周南市 K牧場>

- 日時：平成17年10月22日(土)
- 参加者：4名。関係者2名。牧場関係者1名。
- 内容：

1. 妊娠牛舎見学
2. 飼料給与、直腸検査、鼻環装着
3. 子牛の哺育、意見交換



鼻環装着



直検実習



子牛の人工哺育



低コスト牛舎視察

4. 参加者の感想

衛生面の厳しさに関心した。鼻環装着では、牛の個体差を実感した。肥育牛舎の大きさに圧倒された。牛房を仕切るスライド柵は効率的。子牛の早期離乳や高床式の子牛ケージは参考になった。ある程度の規模になると機械化が必要と感じる。しかし、個人で所有するより共同で使うシステムが必要であると感じた。

ウ <周東町 K牧場>

- 日時：平成17年11月13日(日)
- 参加者：5名。関係者3名。牧場関係者2名。
- 内容：

1. 飼料給与
2. 芋の蔓切断、飼養管理全体の説明
3. 意見交換



飼料給与



機器説明



芋の蔓切断



自給粗飼料の説明

4. 参加者の感想

飼養管理方法は大いに参考になった。本人以外でも飼養が任されるように工夫されていることに感心した。

K牧場の町の畜産支援制度に感心した。

牛への愛情を感じた。子牛育成、牛の扱い方、飼料給与の説明は参考になった。

地域と連携して粗飼料確保の体制を作っていることに感心した。地域での対策として定年者も農業に取組めるシステムを確立させれば新しい農業を目指す人も増えてくると感じた。

(3) 子牛市場視察・意見交換会

- 日時：平成18年1月25日(水)
- 参加者：今年度受講者5名。昨年度受講者3名。特別参加2名。受入農家1名。関係者14名。
- 内容：
 1. 山口中央家畜市場 子牛市場視察
 2. 意見交換(県JAビル 第3会議室)

<主な意見>

1期生

- ・ 50頭規模の放牧経営を計画中。第2の人生として、80代まで自分のペースで仕事ができるのは牛と思っている。規模が大きいため資金対応に苦労も多いが、牛で経営が成り立つことを実証したい。
- ・ 現地研修をした地域に移住。県立農大でもさらに研修し、和牛2頭を購入。初めて分娩し、子牛育成中。
- ・ 故郷の自治会と話し合い、放牧で荒廃した水田などを管理する計画。昨年畜産試験場から牛をレンタルし、実践した。地域の老人たちも昔を懐かしんでおり、放牧の効果も理解。

2期生

- ・ 町内で肉用牛農家がないが、1頭から始めたい。酪農家から交雑種の子牛を育て、前回の子牛市場で販売した。子供の頃には牛がいたことが牛を飼いたいと思った動機。農林事務所畜産部が熱心に指導にきてくれる。
- ・ 大学での研修で北海道の酪農を経験しているが、200頭もあり、作業に追われただけという印象。和牛の放牧ならなんとか世話をできるように思う。
- ・ 交雑種の肥育を行っており、今後和牛繁殖を考えている。県立農業大学でも研修を受けた。和牛もきちんと勉強することが必要と感じる。牛を飼いたい人はもっといるが、このような講座がまだ一般に知られていない。
- ・ 勤めながらであるが、畜産経営を希望しているので参加した。新規就農になるので、土地や牛舎・機器・牛の購入が必要であり、現在、資金を貯めている。



子牛繫留所



セリの視察



セリの視察



意見交換会の様子



意見交換会の様子



修了証の交付

(4) 先進地視察 (長門市)

- 日時：平成18年3月21日(火・春分の日)
- 参加者：今年度受講者5名。昨年度受講者2名。特別参加2名。
関係者4名。
- 内容：

1. 長門市三隅 T牧場の放牧事例：約20頭の肉用繁殖牛を飼養し、自身が授精も行う経営者である。平成16年国道に近い湯免地区で空牛舎(肉用牛肥育牛舎)と水田を借りて、放牧開始。周辺地域への展示効果も考慮している。

水田への放牧を行った際の留意点や発見などを説明。各自意見交換。



長門市三隅 T牧場の放牧地



水田放牧地視察



現在放牧している和牛



放牧地の説明

2 .長門市油谷 M牧場の放牧事例:現在 29 頭の肉用繁殖牛を飼養し、水稲 1.1ha、飼料作 3ha、牛舎隣接放牧場 20a、放牧場 145a を有する。主な作業は奥さん一人。平成 3 年に畜産経営を継承し、5 頭の和牛から増頭。牛舎等設備投資はできるだけ自作で対応し、牛の飼養管理も分娩前後や離乳時期に合せた群分けを行い、きめ細かい管理を実践。放牧も子牛や妊娠牛など健康管理に大いに役立つ。



長門市油谷 M 牧場



手作りのスタンションと飼槽



事業により整備した放牧地の説明



子牛の放牧



一目でわかる牛の繁殖・分娩状況



子牛の放牧場と手作りの木陰

3. 長門市油谷 M 放牧場事例：向津具半島の日本海が見える荒廃した棚田を牛の力で景観の良い放牧地に変え、山口型放牧研究会の会長も務め、和牛放牧の普及に尽力。省力的な繁殖経営を実現するためには放牧は不可欠。



長門市油谷 M 放牧場



放牧取り組みの内容を説明



放牧により綺麗になった棚田



牛をじっくり観察すれば牛が教えてくれる。

放牧視察を終えて記念撮影



第1期生の情報

< 実際に牛を飼い始めたIさんの経緯 >

1. Iさんの受講の動機

福岡県で会社勤めをしていたIさんは、いつかは、田舎暮らしをしたいと考え、九州各地を旅行し、候補地を探していた。ある日、新聞で山口県での肉用牛入門講座の記事を見かけ、平成16年9月、畜産試験場で開催された基礎講座に参加した。

2. 放牧牛への興味

講座の中で、肉用牛の放牧の話に興味をもち、実際に畜産試験場内で放牧されている牛たちを見てさらに感心を持った。

3. 山口県への定住のきっかけと現状

実際の畜産農家で行う体験実習で、旧豊北町角島のYさんと知り合ったことは、Iさんの角島定住を決める重要なきっかけであった。Yさんも東京で会社経営をしていたが、数年前に奥さんの実家が近い角島で就農して、和牛を飼養し始めるなど、同じような経歴を持つ先人であり、Yさんも加入している島の和牛生産組合から、住宅や牛の斡旋を受け、平成17年6月から角島へ定住し、現在、和牛2頭を飼養している。Iさんは、角島定住後、県立農業大学の就農支援塾へ入り、毎週1回防府市へ通いながら、肉用牛飼養の実践研修を重ね、平成18年度も野菜などの研修も受け、さらなる農業の知識と技術を広め、島での生活を豊かなものにしようとしている。

< 生まれ故郷で耕作放棄地の整備に牛を活用するSさん >

1. Sさんの受講の動機

周南市で会社員だったSさんは、定年後、故郷の下松市の下谷地区へ帰るため、県立農業大学の就農支援塾で稲作の実践研修を受けていたが、休耕田での牛の放牧を知っていたこともあり、肉用牛入門講座の募集を見つけ、平成16年9月、畜産試験場で開催された基礎講座に参加した。

2. 放牧牛の能力を確認

基礎講座の中で、放牧がどこでもできることを確認し、実際の畜産農家で行う体験実習では、故郷とよく似た山間部で、牛が急斜面を歩いて山の下草を食べ、牛が山を管理している様子を見ることで、牛の能力を再確認できた。

3. 故郷での放牧開始

Sさんは、集落の自治会の方々も視察に連れて行き、牛の能力を理解いただき、平成17年7月から、畜産試験場の牛2頭を借りて、実際に休耕田での放牧を集落の方々に見てもらうことにした。牛は11月までに雑草を食べつくし、集落の方々からも好評を得た。同時に、地元の6世帯で放牧組合を設立し、里山の景観保全にも役立つ和牛を購入することにした。平成18年度には、土地を購入し、牛舎も建て、和牛9頭飼養を目指して奮闘中である。